

を著して梅室を評して、曰「芭蕉門人没後、連句の達人此叟の上に出る者なし」と、吾人これを讀んで唯啞然たるのみ、現時の所謂點取者流はこの亞流なり、然れども俳諧の流行は幕末惰弱の氣運に乗して士人の門にさへ入りぬ、それが流行の範圍を以てすれば、蓋し元祿を凌駕すとも稱すべし、彼等は元祿の俳書を手にせざるに非ず、彼等は天明の高調を耳にすることあるべし、而して又一人の彼の高調に次ぐ者を見ざるは、固り俳壇活眼の士なかりしによると雖も、俳道に於る一種の偏見亦これが一原因を爲せしが如し、偏見とは何ぞや、乞ふ、梅室を評せし同じ人が如何に若虬を評するかを聞け、

彼は若虬が駄句「寺へ來て拳をにぎる寒さかな」を評して、累々數十言を重ねて曰く「今日の人情偽りなき名句と云ふべし、此叟の句は巧拙を論せず其情を知るを以て人の尊む處なり」と、吾人は再び啞然たらざるを得ず、然れども吾人の思想を以て古人の思想を笑ふを休めよ、斯の如き者は彼等が頗る眞面目に信仰せりし俳道の秘訣なりき、されば文政より明治に至る五十餘年一巻の俳諧の見るべきあるなし、蓋し或はこれあらん、予の淺見未だ見るに及ばざるなり、其俳句に至つては勿論幾多

の名吟なきに非ずと雖も、其大多數は盡くこれ所謂月並調のみ、今彼の名譽談中の所謂名句一二を示せば

背鷺や足をぶらりささけて飛ぶ

若虬

立秋や涼しかれさて灯も匿かず

全

膝出せさすゝめる櫓の馳走かな

梅室

力丈け起きあかりけり露の秋

全

の如きものなり、苟も詩眼ある者何ぞこれ等を以て詩なりとなすを許さんや、所謂俳人は漫りにこれを以て絶唱なりと稱すとすれば、かゝる俳道が漸く學問ある社會に却けられて、終に番頭小僧の境に沈倫せし者亦深く怪むに足らざるに似たり、近時の文士、動もすれば未だ連歌の實質を視はず、未だ俳諧の變遷を究めず、此の憐むべき末路を捉へて、直ちに連俳其者の罪に歸せんとす、誤れるの甚しき者なり、落花地に委して塵芥となる、塵芥の醜は花の醜に非ざるなり、吾人は俗俳の塵芥なるを見る、未だ連俳の塵芥なるを知らず、

我が連歌界の近古後期は遂に斯くの如くにして終りぬ、若し史跡の叙次を以てせば、予は更に進んで明治の時代なる、近代に入らざる可からざる也、然れども予は寧

ろこゝに我が歴史的討求を絶つゝの適當なるを信す、蓋し俗俳の繼續者たる宗匠連
 と、俳諧は發句なりとなせる新派とは、未だ連歌史を讀すべき價値を有せざるべ
 ければなり、されば予は筆を此に擱くに臨んで、連歌界に起こりし未技を畧叙し、更
 進んで連歌に關する予が企望の一端を叙し、以て我が小史を終らんとす、
 連歌の未技として猶少しく、其特質を有する者二あり、冠句と五文字とこれなり、彼
 の有名なる川柳は連歌界に其起源を有せざるに非ずと雖も、それは既に連歌より出
 で、獨立せりし俳句より再び變化せしものなれば、蓋し我が小史の範圍内の者に
 あらざるべし、
 冠句も五文字もともに假字五言より成れる(稀に異例あり)題を置きて前者は七五
 二句より成れる句、後者は單に五言一句の句を作るものなり、其題と句との關係は、
 詩歌などの其題に於る關係とは頗る趣を異にして、宛然連俳の前句と附句との關
 係に似たり、例せば、

和らかに 誰が氣にも合ふ人の唇、
 いそぐと 見せ物の髪結ふ繼母、

れつそりこ 乙姫の不義云ひし娘、

(右冠句、「俳諧田かり笠」刊行年代未詳)

もこのもくあみ 娘が死、

あざける ちいさな手、

本望 去らせて添ひ、

(右五文字、「豆餓炮初編」明和四年刊)

これ等のものは、若し其形式だに五七五と七七との句に改めなば、大筑波「鷹筑波」集
 中のものたるを得べし、これ予が尙ほ連歌の本質を有せりと云ふ所以なり、
 五文字も冠句もともに其歴史的變遷を有せざるに非ず、然れども其詳細なる沿革
 に入るは勿論我が小史の事に非ざれば、今は只共に我が近古の後期に發達したる
 者なりと云ふことを以て満足せざるべからず、其既に安永天明の復興期以前に流
 行せし者なることは、豆餓炮刊行の年代亦これを證す、

九、結論

予は茲に予が歴史的討求を終りぬ、顧みて思へば予が當初の企望は、其の十の一を
 だに全ふすること能はざりき、これ固より予が淺學寡聞の致す所なりと雖ども、連

俳の書多く散佚して傳はる者稀なること亦關て力なくんばあらず、これを帝國大學圖書館或は東京圖書館に見るも元祿以前の俳書の如きは實に晨星も管ならざるのみならず、純正連歌の書に至つては群書類聚及び續群書類聚を除けば殆んど見るべきものなきを見ても、亦た其の散佚の狀を想見するに足らんか、予が淺劣の才を以てこの不充分なる資料を以て、事實を結ぶに推測を以てし、歴史に交ふるに憶斷を以てし、敢てこの小史を企つ、其單に脱漏あるのみならず、時に錯誤を免かれざるべきは、固より自ら期するところなり、願くは江湖該博の士叱正の勞を惜まざらんことを、予も亦自ら精勵業を續で大正を他日に期することを遺れざるべし、蓋し連歌の物たる、所謂宗匠連が夢想するが如き大なる豫望を未來に有し得べき者に非ざるとともに、所謂文學者の一派が絶えて推測せざるか如き大なる勢力を過去に有せしなり、されば吾人は未來の連歌としては唯遊戯文字として、圍碁よりも骨牌戯よりも其他種々なる遊戯よりも更に大なる快味を與へ得べき者たるべきとを信ずるの外、何等の豫期をも希望をも有せず、唯過去の連歌に對しては、日本文學史の一部として、充分なる研究を要するとともに、大なる文學趣味の其間に認

むべき者あることを信じて疑はざるのみ、

何が故に然く過去に重んじて未來に輕んずるか、曰くそれは過去の文學として頗る適當なる者にして、未來の文學として不適當なればなり、弓と矢とは過去の武器として適當なる者なりき、而して未來の世界は唯遊戯の具としてのみこれを使用すべし、それは未來の武器として不適當なればなり、統一なき連歌の長篇變化に專なる歌仙と百韻が、到底戯曲小説其他の完全なる叙情叙事の詩に比するに足らざるは、宛も弓と矢が完全なる銃砲に比すべからざるに似たり、世界既に完全なる銃砲あり、而して尙ほ弓矢を弄して戰場に立たんとする者あらば、狂する者に非ずして何ぞや、されば予は明治の俳諧を以て、遊戯に非されば狂者の業なりとなすに躊躇せざるなり、然れども古の世界は今の世界に非ず、與市と爲朝とは古の勇士なり、宗廟と宗祇と梅翁と蕉翁とは文學史上不朽の偉人なり、よしや不完全なる形式の上に顯はれたりとも、詩想の價值は永久の價值なれば也、

世人或は云ふ連歌は變化を主とす、變化は由來文學の要素に非ず、故に連歌は文學に非ずと、これ明かに理論上の錯誤に陥りたる者なり、連歌の作者が變化を主とせ

しは實事なり、然れども變化其者のみが連歌に非ざるなり、そは變化を有するとも文學の要素を有し得ずと云ふべからず、近松が戯曲は劇場の人氣を主眼として作られたり、去かもそは大なる文學に非ずや、多くの科學的著作、ことに史傳の書は屢々文學書として數へらるゝに非ずや、而して人氣と科學的精細とは文學の要素に非ざるに非ずや、其重んぜし處其主とせし處を以て、文學非文學を區劃せんと欲する者は、必竟速斷の識を免かれず、苟も連俳を解する者は何人も七部集を以て日本文學以外に拋棄することを敢てせざるべし、

連歌と俳諧とが我が文學史上に於る價值、ことに室町江戸時代に於る價值は、我が小史の讀者の業に既に了解せる處にして、今更に喋々するを要せざるべく、其間接の影響に至りては、江戸時代の文學ことに所謂俗文學を研究する者の最も注意せざるべからざる處なり、風俗文撰鶉衣等の俳文はさらにも云はず、西鶴が遒勁簡潔の筆は確かに梅翁の高弟として養成せられたる者に於て、巢林子が婉轉委曲の妙も亦西鶴の弟子として(俳諧袋によ)頗る俳諧に負ふ所多きに似たり、(近松が戯曲中殊に著明なる道行き或は物盡し)などの一種類の名詞を點綴しつつ、有意無意の

間に縁語係語等を以て文章を變轉し去る所は、頗る俳諧の變化及び賦物の法に負ふ所あるが如し、而して有名なる歲時記は小説界の偉傑馬琴の作にして、貞門の俳諧新式は、俳人にして同時に小説家なりし露氷が著なりとすれば、連俳を外にして徳川文學の完全なる研究を遂げんとするは殆んど爲し得べき事に非ず、

予が始めて此稿を起し、は實に二年の以前に在り、當時の世界は實に未だ連歌を知らざりき俳諧を顧みざりき、眞價ある者は終に其位置を得べし、發句に專なりし俳壇は、今や俳諧の練習を初めぬ、めざまし草と帝國文學とは、とにかくに俳諧を掲載せしことありき、京都の北野神社、上野の東照宮は、その嘉例の連歌を復興せんとし、尾州の某氏は連歌の式目を調査しつつあり、帝國大學には七部集の講義起りぬ、予は予が絶叫の聲の大なる反響を得る能はざりしを嘆せずして、唯文學の氣運が漸く予が希望する所に向ひつゝあるを歡ぶのみ、

連俳小史終

(此小史は曾て帝國文學に掲載せしものなるを以て帝國文學會の認許を経て出版せり)

明治三十年七月一日印刷
明治三十年七月五日發行

連排小史

定價金四拾五錢

著者 文學士 佐々政一

發行者兼印刷者



東京市京橋區銀座一丁目廿二番地
大日本圖書株式會社

右代表者 專務取締役 佐久間貞一

東京市京橋區銀座一丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

大阪市東區博勞町四丁目十七番屋敷

同社
各府縣下賣捌所

發賣所

(行 發 日 十 回 一 月 每)

帝國文學

(刊 發 日 十 月 一 年 八 十 二 百 零 七 號 初 創)

帝國文學は文科大學に緣故ある博士學士學生諸氏其他諸名家先生の組織せられたる帝國文學會の編輯に係り主として日本文學の進歩を誘ひ帝國精華の發揚を期するものなり故に其載録する處の論説は正大又謹嚴紛亂雜駁たる今日の濁潮中に儼立して光輝燦然其に文海唯一の燈臺たるに背かず其詞藻は麗且つ豐富或は新體或は擬古或は俳文或は漢詩或は寄營なる俳句高尙なる小説をも加へ時には戯曲謠曲狂言の創作をも録し悲哀と諧謔と高雅と通俗と文界の萬象茲に一切網羅して遺す所なく加ふるに帝國文學は各國文學の精髓を萃めて將來日本文學を大成することを期すれば其維録には西人の詩想文致を紹介し讀者をして泰西偉人の風采を想見せしむるに足るべく其他の漫記雜筆孰れも興味津津として盡きず若し夫れ文學史料に輯むる所皆是れ正確なる資料に因りて周到なる研磨を遂げ一筆の末も苟くもせざるものにして是れ我帝國文學の特長として誇るに足る所好學の文士最も留心を要す維報は眞を傳へて簡淨明快批評は公を持して痛切適確若し夫れ奔騰し來れる我文界の新潮流を知らんと欲するものは請ふ之を我帝國文學に徴せよ初號より取揃へ高價に應ず

帝國文學近刊目次拔萃

- 新詩論……………文學博士 井上哲次郎
- カリエールが美學の立脚地……………櫻江 義丸
- 詩眼に映せる救世の使命……………文學士 楠崎 正治
- 現代の英國詩歌……………上 四 敏
- 韻鏡の解釋に就きて……………大島 政健
- 詩歌に於ける古語の俗語……………文學士 大町 桂月
- 希臘文學と哲學思潮……………竹末悌四郎
- 四條暖簾古……………中村 秋香
- 比呂山の歌……………文學博士 井上哲次郎
- 立卷……………文學士 武島 羽衣
- 高橋廣近の消息……………平出鑑二郎
- 晴曲中の「けいさば」の表……………文學士 芳賀 矢一
- 我國民の自然觀○文士の多能○小説家の地位○今日の詩論詩界○外國語の教習○教育界に告ぐ○國學と文科大學○劇界私言○雜誌五十五種批評○此外論說、隨筆、雜錄、文學史料、内外雜報、新刊書批評の各欄精華を蒐む

● 定價 一冊金拾圓郵稅壹圓 ● 六冊金五拾五圓
郵稅六圓 ● 十二冊金壹圓郵稅拾貳圓

發行元大日本圖書株式會社

教育學館校定 朝夷六郎編纂

國文教科書

全七冊

定價 (一)編上金拾五錢 (二)編下金拾六錢 (三)編上金拾九錢 (四)編下金拾七錢 每冊郵稅貳錢

この書は尋常師範中學兩校の教科書に供する目的を以て編纂せるものにして易より難に進むの順序を用ひたるは勿論初めに近代の文章和歌を選次し巻を逐つて古の文章和歌を編次しその材料は名教に益あり現時の教育に適切なるものを探擇し第五と第六の二巻には邦文學史の概要を論述せり且兩校國語科の教授時間及國語科の教授を全ふすとを得べきなり

教育學館校定 加部嚴夫編述

語學教授本

附錄共 二冊 定價金五拾錢 郵稅金六錢

本書は尋常中學、尋常師範學校又は高等小學に於て國語を教授するの資料に供するものなり抑國語は必要の學科なれども從來教科書の無き爲に是を教授するに當りては甚だ困難を感ずる所なり是を編述せり且年工易く學び易からん爲に詞を七種に分ち平常誤用し易き詞を擧げて其活用を圖に照して之を正し一見以て了

解し易からしめたり附録には活用全圖詞寄せ名詞字音の假字をも遺さず之を掲げれば教授の際必要なるのみならず平常座右に置きて假字遣等を査ふるに最も便利なり而して本書は教師用のものなれども生徒をして此を携へしむるときは教授上の手数を省くと決して大なるべし

教育學館校閱 寄藤好實著

初國語假名遣讀本

全一冊 定價金貳拾錢 郵稅貳錢

本書は高等小學校生徒、若くは中學初級の生徒をして國語の中、現時最も必要のものに之を讀ませしむるに於て、假名遣の體裁を悟り并せて愛國の思想を發起し、國粹の保存に着眼せしめ、能ふべき文、語原を究め、因て、より、器械的暗誦の困難を排除し著者が其局に居りて、早きは五、六時間、遅くも十時間を出でずして、能く其大體を理解せしめ、過るのみならず、讀みの必要なる、きは、容易に忘却するの憂なし、讀みの必要なる、文典上の法則を解きたれば、讀みの必要なる、用生徒用として最も適當なり

英人チャンプレン著

日本小文典

全一冊 定價金七拾五錢 郵稅六錢

本書は尋常師範學校及中學等に於て文法を授くるの教科書に充つるものなり、理法を歐洲に資りて以て、示し、卷中に多く表を挿み、學者の提覽に備へたり、又音韻を論ずるに、至りては、漢字又は假名文字を用ふる、其本質を充分に理解する、能はざる、徒の爲に、漢字を用ひて之を、且、羅馬字に、熟せざる、爲に、漢字交り文にて之を、其上、層に、記したり

英人チャンプレン編纂

英語發音法

全一冊 定價金拾壹錢 郵稅貳錢

本書は英語發音の方法規則を解説せしものなり、抑も英語の發音たるや、極めて困難にして、英米に於ても、人々其所謂變則流弊に陥りて、訛言を傳ふる、本邦學者の間には、合舌の位、等、に依りて、丁寧に、解し、更、に、圖、解、及、口、の開、充、つ、つ、ら、ば、其、益、蓋、渺、か、ら、ば、諸、學、校、に、於、て、更、に、獨、り、教、員、生、徒、に、止、ま、ら、ず、英、文、獨、修、者、の、爲、め、に、亦、有、用、の、書、なり

文部省編纂

露和字彙

全三冊 洋裝 定價金拾八圓

本書は露西語と本邦語の對譯せしものなり、且、一貫四百、餘、の、語、を、收、め、て、其、中、に、露、和、字、彙、の、冠、たり、頗、る、年、露、國、皇、太子、殿、下、の、精、に、於、て、多、年、經營、の、功、を、積、んで、大成、せし、もの、に、して、文、部、省、の、我、國、御、來、遊、に、際、し、本、書、を、献、して、頗、る、年、露、國、皇、太子、殿、下、の、語、を、研究、する、に、は、必須、の、書、なり

文學博士 外山正一 中村秋香作 文學士 上田萬年 坂正臣作

新體詩歌集

改頁紙 大和綴 美製 定價金參拾錢 郵稅四錢

題して新體詩歌集といふといへども、通常一般の新體詩を、縱、横、無、碍、に、發、露、せ、ん、に、は、眞、に、此、體、に、倣、ら、は、さ、る、べ、から、ん、か、一、吟、天、地、動、き、再、吟、鬼、神、哭、す、と、は、眞、に、此、集、の、謂、

伊東海軍々令部長題辭 海軍大尉木村浩吉著

海軍圖說

全一冊

本文判二百頁 木版及石版畫六十七圖 挿入(上等) 定價金六拾錢 郵稅十二錢 舶來洋紙表紙色クロト 金模標入(並製) 定價金卅八錢 郵稅十錢

本書は木村海軍大尉が我國民の未だ海軍思想に乏きを慨せられ多年の實踐經驗に據り海軍の組織上軍艦に關し水雷大砲を始め航海砲艦内諸動作の事に至る迄毎條精密なる圖畫を掲げ小學校生徒と雖解し易き様最簡明に説明せられたるものなり故に之を一讀せば凡そ海軍に屬する細大百般の事瞭然として指掌の如く因て以て海軍の我國に於る最大急務たることを悟りし躍然其思想を啓發勃興せしむると疑を容れず實に現今我國民の教育上闕く可らざる其書也本書出版に就ては宮内省より殊に御下賜金ありて國內に普及するを容易ならしめられたり弊社は謹んで大尉の訓命に基つき御趣旨を奉戴し務めて價額を低廉にし通常價額三分の一を定價とし一日も早く海内に普及せしめ以て聊か報國の微衷を表せんとす四方の諸君希くは迅速購讀あらむとを切に望む

理學博士 齋田功太郎著

大日本普通植物誌

全一冊

定價金壹圓七拾錢 郵稅金拾四錢
 四六版四百余頁 製本採集携帶用特別製
 本書は尋常師範學校及高等師範學校の生徒用教科書並教師參考書に充んが爲め多年經驗の功を積んで大成せられたるものなり我國未だ此種の好著なし

有栖川熾仁親王殿下題字 國家教育社編

聖諭大全

全四冊 全部量目 九百

首卷 定價金四拾五錢 郵稅八錢
 上卷 定價金七拾五錢 郵稅拾貳錢
 中卷 定價金壹圓 郵稅拾八錢
 下卷 定價金壹圓廿五錢 郵稅卅錢

本書は教育に關する勅語の聖旨を敷衍するに古來列聖の遺訓と明治昭代の偉績とを以てしたるものなり抑聖旨は深遠廣大何人も窺知す可からざる所なれば一己の私見を以て解釋等を下し得べきものに非ず故に國家教育社に於て先づ編纂大綱を定め今日我國に於て國史及國粹の學に明なる老儒碩學中文學博士重野安繹、文學博士小中郎清矩、佐藤誠實、岩下方平、内藤耻叟、加部殿夫等諸先生の意見を探討して國家教育社員磯野徳三郎君之れが主任となり佐藤誠實君加部殿夫君松岡修輔に任じ社長伊澤修二先生總理補定の責に任じ只管之れを撰定し教育者の實地教授の用に資し以て聖旨の萬一を貫徹せんとを期して大成せられたるものなり

發兌 東京 大日本圖書株式會社
 大阪 同 支社

文學士 大町桂月先生著
 ◎國文學大綱 全十二冊

○第一卷 契沖阿闍梨 第三版 定價金貳拾錢 郵稅六錢

理學士 松村任三先生 齋田功太郎先生 合著
 ◎中植物教科書 全一冊 定價金六拾五錢 郵稅六錢

理學士 澤田吾一先生著
 ◎中代數學教科書 全二冊 上卷 定價金六拾五錢 郵稅六錢
 下卷 定價金三拾五錢 郵稅四錢

發賣所 大日本圖書株式會社

文學士藤田劍峯先生白河鯉洋先生田岡嶺雲先生著
文學士笹川臨風先生大町桂月先生

支那文學大綱

◎全部十六册三十年七月
より毎月一册宛發刊す
一册凡菊判二百頁定價金貳拾五
錢郵稅一册に付凡四錢
八册前金壹圓五拾錢郵稅卅二錢
十六册前金三圓五拾錢郵稅六十
四錢

物、沈滞すれば、必ず腐敗す。文學の進歩を圖らむと欲せば、常に新分子を入れて、之を融化するべからず。今日我が日本文學の爲に盡さむとするは、西洋文學の研究を怠るべからざるは、言を待たざれども、果して能く支那文學の妙味を咀嚼し、精神を融化し得たる乎。嗚呼！大河滾々として東流する東亞細亞の大陸國を立つること尤も古く、文學尤も豊富に、上下四千載、上は詩より下は戯曲稗史に至るまで、詞華鬱然、文星燦として列をなす。其沈鬱若勁にして雄拔悲壯なる詩趣文藻は、之を泰西の文學に求めて之なく、詞章と云ひ思想と云ひ、支那の文學は、一種特有の性質ありて、永く世界の文壇に雄視するに足る。まして奈良朝以前より我國に傳はりて、遊仙窟は己に萬葉詩人の融化する所となり、平安朝に至りては、文選、白氏文集尤も盛に讀まれ、其影響感化の著しきこと、歴々として徴すべく、以後支那文學の趣味益々加りて、日本文學益々面目を改めたるにあらざるや。日本文學を研究するは、必ず支那文學を研究せざるべからず。支那の詩文多して文豪の夥しきこと、幾んど比倫なく、一朝一夕にして伺ひつぐすべくもあらず。茲に暫く、孟子、莊子、屈原、韓非子、司馬相如、司馬遷、曹子建、陶淵明、李白、杜甫、韓退之、柳宗元、白樂天、蘇東坡、陸放翁、元遺山、宋景濂、高青邱、明七子、湯臨川、清初名家、李笠翁の廿二人、先秦以後清に至るまで時代の文學を代表するべき大詞人を取りて一冊一人或は數人を限りて其人物學問製作を詳説し、兼ねて其時代の文學を論じ、前後相貫通して以て支那文學の美を發揮せんとす。國文學大綱と相待て、文壇長好有益の大著述なり。支那文學其物已に價値あり。日本文學を研究し、日本文學の進歩を圖らむとせらる、諸君は殊に一本を備へて參考に供へ給ふべき也。

◎第一卷には笹川臨風君の孟子、田岡嶺雲君の莊子、藤田劍峯君の韓非子を載す。その俊健爽豪の筆致と明徹靈活の眼孔とを見られよ。

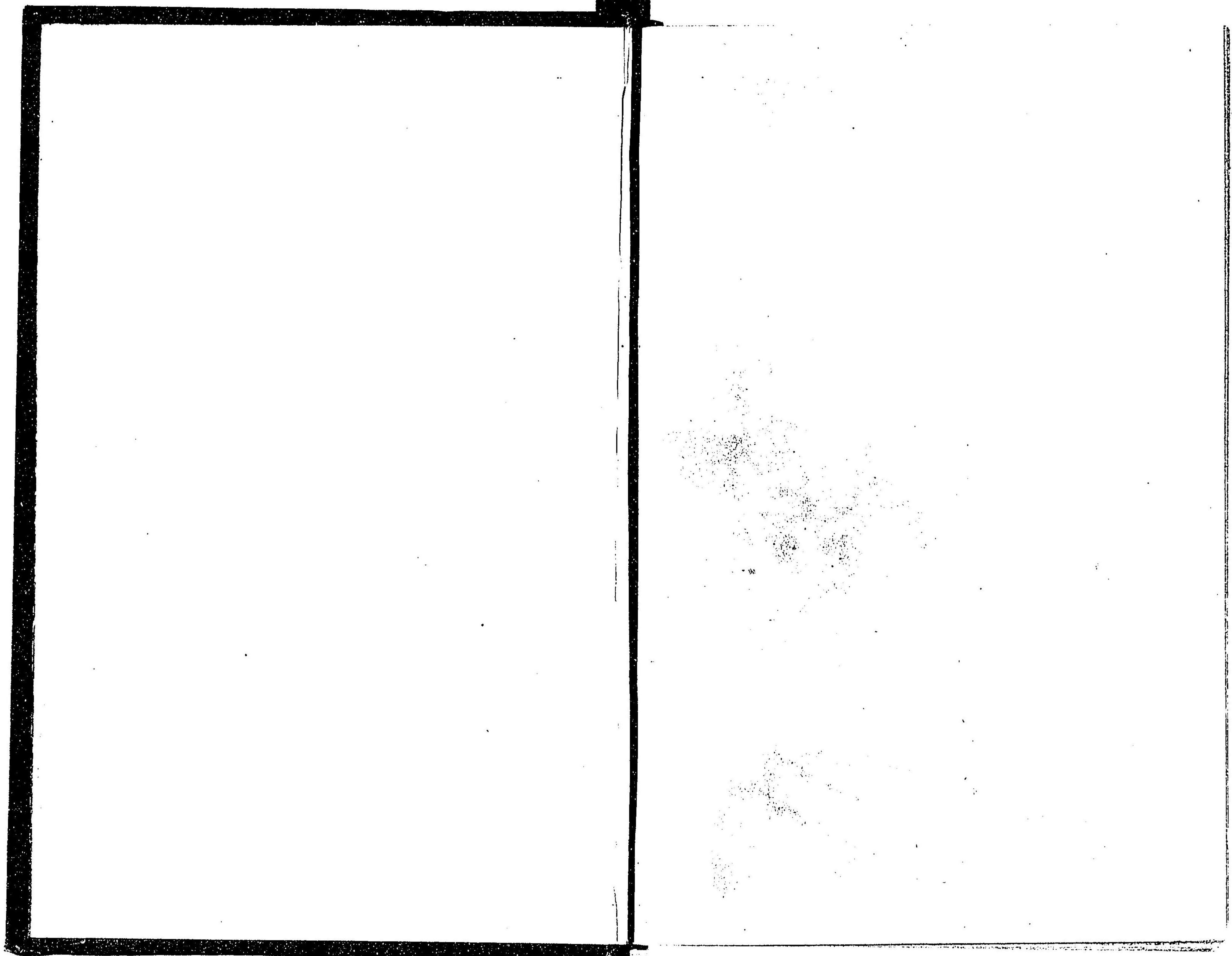
發兌

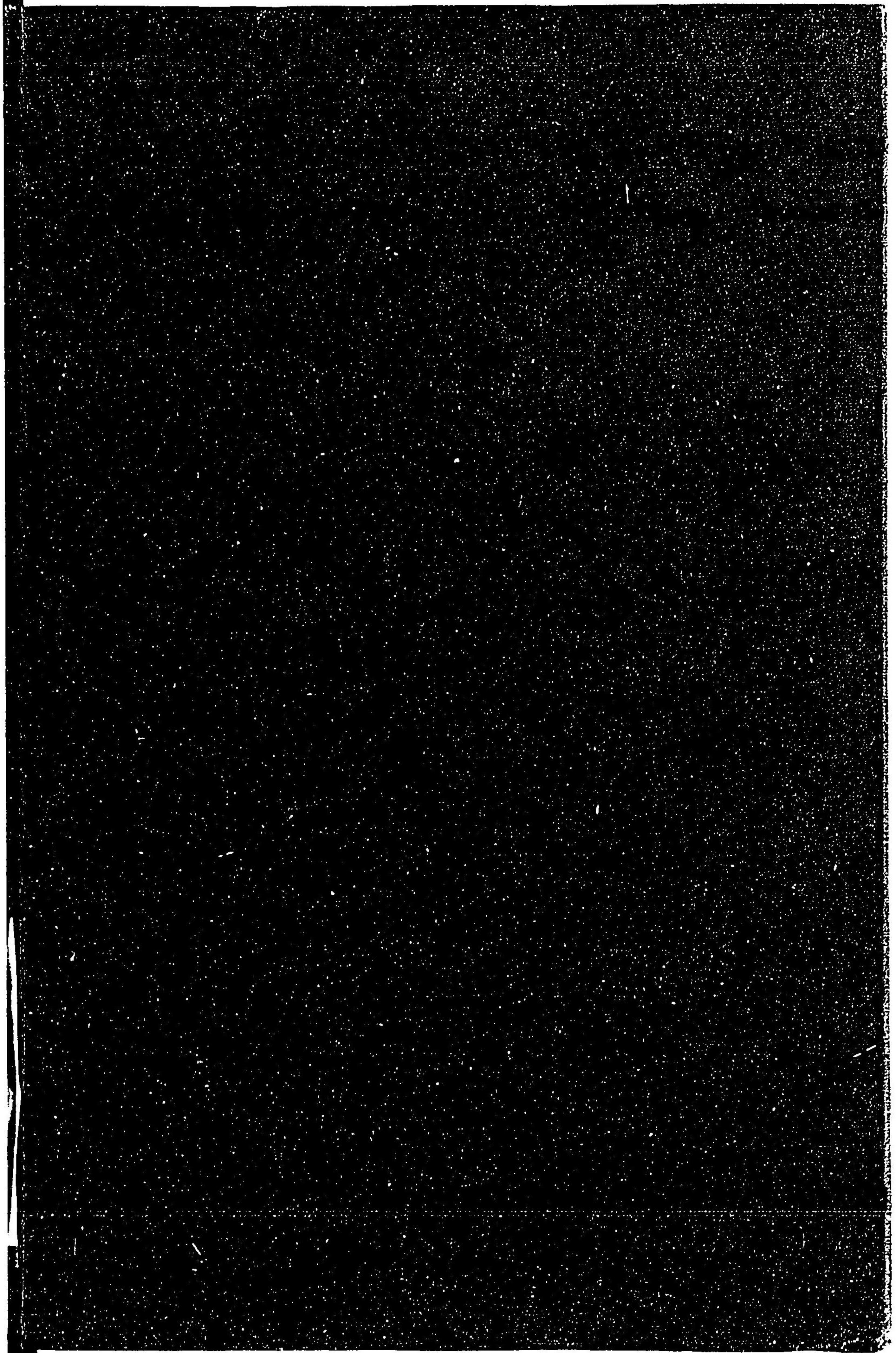
東京市京橋區銀座
一丁目二十二番地

大日本圖書株式會社

大阪市東區博
勞町四丁目

同支社





911.2

Sa 747r

087690-000-2

911.2-Sa747r

連俳小史

佐々 政一 / 著

M30

DBE-1162

